

## <学会記事>3. ハイドロキシアパタイトを用いた顎堤保存に関する基礎的・臨床的研究(第9回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	庄司 茂, 鈴木 祐平, 渡辺 郁子, 堀内 博
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	5
号	2
ページ	134-134
発行年	1986-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31227">http://hdl.handle.net/10097/31227</a>

1979.

### 3. ハイドロキシアパタイトを用いた顎堤保存に関する基礎的・臨床的研究

庄司 茂, 鈴木祐平, 渡辺郁子, 堀内 博 (歯科保存 1)

篠木邦彦 (口腔外科 1)

生体組織と親和性を有する無機材料の開発が進み, バイオセラミックス, 中でもハイドロキシアパタイトが注目を集め, 人工歯根や骨欠損補填材料として臨床応用されている。

Denissen ら (1979) は, 抜歯後の顎堤の吸収を防ぐ目的で, 円柱状のハイドロキシアパタイト緻密体 (以下 HAC と略す) を, 抜歯窩に埋入し, 臨床的にも効果が得られたと報告しているが, Denissen らが用いた HAC は, マンガンなどの不純物を含んでいるため, 青紫色を呈している。

今回, ハイドロキシアパタイト純度 99% で, 白色透明で, しかも円柱状の他に卵円形など 8 種類の HAC を入手し, 同様の実験を行った。

〔術式〕 抜歯窩に金属性プローブを挿入し, 抜歯窩の深さや歯槽骨の高さを測定した。そして, HAC の上端が歯槽骨頂より 2 mm 下になる HAC を選び, 抜歯窩に挿入し滅菌綿棒または根充用ピンセントで HAC を上から圧迫した (縫合せず)。

〔結果〕 成犬の上顎側切歯, 下顎前臼歯を用いた実験で 9 カ月間観察した結果は, X 線的にも病理組織学的にも HAC の上部が骨によって被覆されていた。患者の同意のもとで臨床応用を行い, 2 日から 1 年 5 カ月間合計で 7 症例の経過を観察した。抜歯後ドライソケット様を呈し 2 日後に除去した 1 例を除いて, X 線的にも HAC は骨で被覆され, 義歯床下粘膜の腫脹や疼痛, HAC の露出といった臨床症状は認められなかった。

〔考察〕 根部のウ蝕が深くまで進んだ症例, 歯周疾患と根尖部病変が合併し, 保存不能と思われる症例などでは, HAC を用いて顎骨の吸収を防止することは, 意義があると思われる。

### 4. 口臭を主訴とする患者の口内気体中硫化物量と症状との関係についての研究

小原陽子, 岩倉政城, 島田義弘 (予防歯科学講座)

ガスクロマトグラフィを用いて口臭を主訴とする患者の口内気体中硫化物定量を行い, どの物質が口臭に

関与しているかを検討した。併せて口臭と関係あると思われる口腔内症状の診査及び幾つかの検査を行い, 両者の結果を比較し, 口臭診断上意義のある症状及び検査法を模索した。

口臭を主訴とする外来患者 19 名について問診 (口臭の自・他覚, 人の態度から気にしているか), 歯科医師の嗅覚による口臭判定, ガスクロマトグラフィを用いての口内気体の分析, 口腔内診査 (う蝕, 排膿, 出血, 食片圧入, 舌苔, P.I., DI, CI, OHI), 患者の嗅覚能力検査, 質問紙調査 (C.M.I. 健康調査, Y-G 性格検査) を行った。

これによって得られた成績の検討から,

1. 嗅覚により口臭ありと判断された患者に 3 種硫化物 (硫化水素, メチルメルカプタン, ジメチルサルファイド) が多く ( $P < 0.05$ ), この内メチルメルカプタンは口臭のある患者に必ず存在し, 口臭の主な原因物質であると判断した。

2. 口腔内症状のうち DI とメチルメルカプタン ( $P < 0.001$ ) 並びにジメチルサルファイド ( $P < 0.01$ ), OHI とメチルメルカプタン並びにジメチルサルファイド (共に  $P < 0.01$ ) 間に統計学的有意な正の相関を認めた。

3. イソ吉草酸の嗅覚閾値の高い者ほど口内気体中メチルメルカプタン, ジメチルサルファイドが多い傾向にあった ( $P < 0.05$ )。

4. 口臭の自・他覚, 人の態度から気にしている事と硫化物量との間に特別な関係は認められなかった。

5. C.M.I. による I~IV 型と硫化物量, Y-G 性格検査による型別と硫化物量との間に特別な関係は認められなかった。

### 5. ポピドンヨード希釈液の口腔内消毒薬としての効果について

佐藤秀一, 佐藤成美, 鈴木正規, 藤田 靖 (口外 I)  
谷津寿郎, 小野田和広 (臨検室)

口腔内消毒薬としてイソジン液 (ポピドンヨード 100 mg/ml, 有効ヨウ素 10 mg/ml) を用いる場合の有効希釈倍数を知るため, 唾液を主検体とし各希釈倍数における口腔内細菌の増殖の有無を調べ, 同時に病原菌に対する効果, 有機物混入時の効力低下も調べたので報告した。

材料, 方法. 試薬: イソジン滅菌蒸留水希釈液. 培地: GAM ブイヨン培地, GAM 寒天培地, 血液寒天培地. 検体: ① 唾液. ② 唾液遠心分離後の沈殿物. ③